



TITLE:

# サマーデザインスクール2015 --その次へ

AUTHOR(S):

北, 雄介

---

CITATION:

北, 雄介. サマーデザインスクール2015 --その次へ. デザイン学論考  
2016, 5: 3-5

ISSUE DATE:

2016-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218178>

RIGHT:

# サマーデザインスクール2015 —その次へ

Summer Design School 2015 -Toward the next step-

北 雄介

KITA, Yusuke

京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット特定助教  
サマーデザインスクール2015 実行委員長



もう3ヶ月も前ではあるが、今年の夏祭りが終わった。筆者は恐れ多くも実行委員長を務めさせていただき、反省点は多々あるものの、皆様のご協力のおかげでなんとか無事に終えることができ、ほっとしている。改めて感謝を申し上げたい。

ワークショップというものが単に「イベント」として、「やりっぱなし」で終わってしまうと勿体ないかと、筆者は常々思う。ただサマーデザインスクールについては「素数ものさし」などの実現事例があり、また今回も、京都市やデザインイノベーションコンソーシアムを巻き込んだ継続議論を行なっている有志チームもあるようで、今後の展開が楽しみである。

このようなプラクティスへの展開と並行して、筆者が関心を持っているのがサマーデザインスクールを起点としたデザイン学の探求である。その可能性と取り組みについて、小論を書き起こしておきたい。

## 1 デザイン学におけるサマーデザインスクールの可能性

筆者の関心には大きく2点ある。まず、サマーデザインスクールは本当に質の高いイベントとなっているのであろうかという問いである。これはデザイン学の教育の場をどうデザインするかという問題とも関連する。

アンケートによると、2011年に始まったサマーデザインスクールはこれまで毎年高い満足度を維持しており (fig.1)、参加者数は着実に増加している (fig.2)。京大以外の大学や企業からの参加が増加しているという点からも、京大デザイン学を広く世に知らせる素晴らしい機会になっているといえるだろう。ただ fig.1の結果は喜ばしいが、イベント終了直後の熱気ある状態で取っている3択式アンケートによるものでもあり、そのまま受け取って満足してよいものである

<sup>i</sup> サマーデザインスクール2015の概要や詳細に関しては、webを参照されたい。  
公式サイト: <http://www.design.kyoto-u.ac.jp/sds2015/>  
実施報告書: [http://www.design.kyoto-u.ac.jp/sds2015/report/sds2015\\_report.pdf](http://www.design.kyoto-u.ac.jp/sds2015/report/sds2015_report.pdf)

うか。本当に質の高いイベントとなっているのだろうか。サマーデザインスクールの第1回から参加者や運営者として関わっている身として、それが筆者の実感である。毎年やりきただけで精一杯というのが運営者や実施者の本音ではあるが、そこは京大デザイン学の看板イベントとして、より質を高めるべくデザインをし続けるべきではないだろうか。

サマーデザインスクールの質について考えると、大きく「サマーデザインスクール全体の運営の質」と「テーマワークの質」に二分できるように思う。ただ今回実行委員長を務めてみて実感したのは、あくまで全体運営は黒子であるということだ。参加者の活動時間のほとんどは個別テーマワークに注がれるのであり、ここの質の向上がポイントであろう。もちろんテーマワークの質を上げるためには、実施者の努力だけではなく、運営側のひくガイドライン（テーマ募集方法やプレゼンテーション・投票の形式など）も重要となる。

もう1点は、デザインの実践活動からいかにデザイン学という学問を推進ないしは構築していけるのかという、サマーデザインスクールのみに留まらないより一般的な問いである。

実践と理論との乖離はさまざまな分野で問題になっており、デザイン分野でも両者の関係を巡る議論がある。たとえばFraylingはresearch in design / into design / through design / for designなどの研究と実務との関係に関するスタンスの違いを論じており<sup>ii</sup>、松岡はデザイン行為を「デザイン実務 (design practice)」「デザイン方法 (design method)」「デザイン方法論 (design methodology)」「デザイン理論 (design theory)」の四つの階層で整理している<sup>iii</sup>。また両研究者ともに、実践と理論との統合の必要性を説く。実践から方法を抽出し、それを操る方法論を構築し、そしてデザインとは何か、どうあるべきかを探求する理論にまで深めること、またその逆のベクトルで理論から実践へと昇華させること。このような理論と実践との循環運動を実現することが、京大

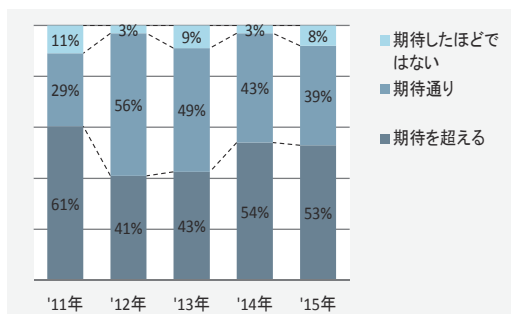


fig.1 参加者アンケート「内容は期待通りでしたか」に対する回答の割合の推移

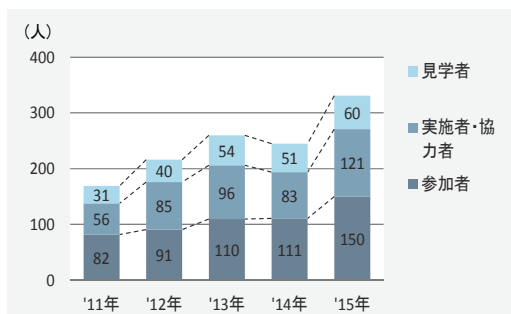


fig.2 参加者・実施者・見学者数の推移

<sup>ii</sup> Frayling, Christopher : Research in Art and Design, RCA Research Papers, vol.1, No.1, Royal College of Art, 1993.

<sup>iii</sup> 松岡由幸編著・デザイン塾監修：デザイン・サイエンス 未来創造の六つの視点，丸善，2008，p.9.

デザイン学の任務の一つであると筆者は考えており、またこれまでの「デザイン学論考」誌でも大きな論点の一つになっているように思われる。サマーデザインスクールでは、3日間という短い期間に20以上ものワークショップが実施される。したがって、デザインの実践と理論との関係を考える絶好の機会ではあるまいか。

## 2 現在の取り組み

以上のような認識のもと、今年度のサマーデザインスクールではそのアクティビティを記録することに力を入れた。ワークにおいて何が行なわれ、それに対して実施者・参加者がどのように感じているのかを知ることで、サマーデザインスクールの改善につなげ、また実践に基づく理論研究の基礎資料とするためである。皆様にはいつもより多量なアンケートや、リアルタイムのプロセス記録などにご協力いただいた。ご負担はおかけしたと思うが、デザイン対象の設定、デザインの手法、その導入のタイミング、参加者の反応や展開のスピードなどに驚かされることが多々あり、また各人の考え方や人柄までもが透けて見える興味深い資料となっている。

さらに実施者・参加者の方々に、サマーデザインスクールでの経験をもとにした原稿の執筆をお願いした。本号の4本はいずれも力のこもった論考となっており、収集したアンケートやプロセス記録に輪をかけて、テーマワークの実情・実感が伝わってくる。上述のような問題意識を持つ者として、また実行委員長として、(耳の痛い点も含め)大変読み応えがあった。次号にもいくつかの論考が掲載される予定で、楽しみである。筆者自身も現在、アンケート等のデータを坂口君、佐藤君(いずれもプログラム1期生)とともに分析しており、次号にてその結果をお見せしたい。

### 「デザイン学」への問い

+ あなたにとって、サマーデザインスクールの経験とはどのような意味をもつものですか？